

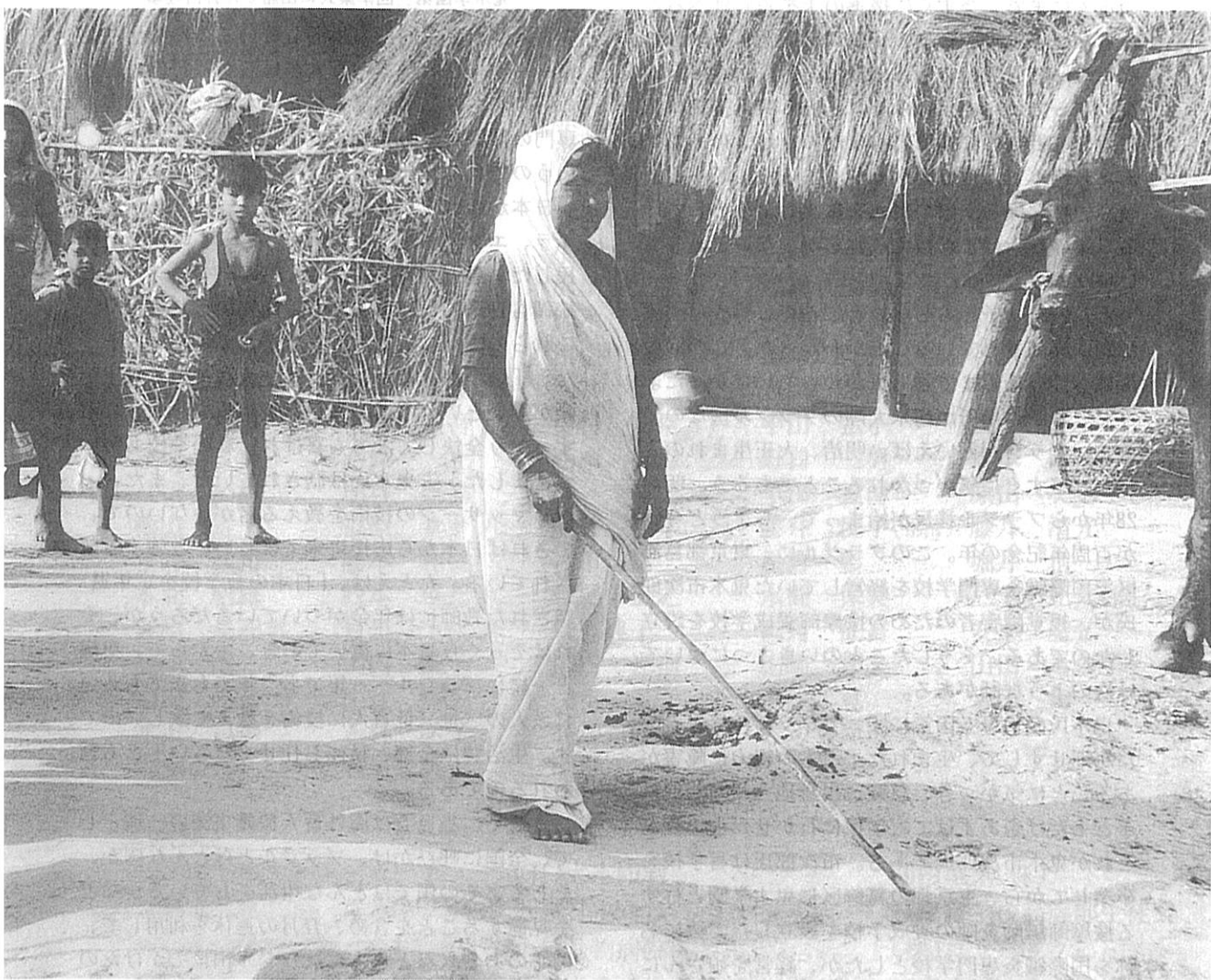
LIGHT OF LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No.10 1995. 7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



歩行訓練をする盲婦人

ネパール・バラ郡パタラ村で

ブラジルの日系人二世三世盲人に援助の手を

海外援護担当理事 井口 淳

「国連・障害者の十年」に続き、「アジア太平洋障害者の十年」が設定され、すでに三年を迎える。なぜ、障害者年が続くのか？ 言うまでもなく、障害者の自立に対しての諸策が十分でないことと、障害者の立場を一般の人々にも十分に理解してほしいとの願望からである。

当協会が「海外盲人援護事業」を開始したのは、「国連・障害者の十年」が始まる前年の1982年である。日本の盲人指導者のなかには、「何も外国の盲人にまで、今すぐに援護の手を差し延べることもない。まだ、日本の盲人には援助しなければならぬ者も沢山いるし、我国の盲人がもっと裕福になってからでよいのだ」と海外盲人援護事業に対して批判的な指導者も多かったが、最近では、あまりそうした声は聞かれなくなった。しかし、積極的に発展途上国の盲人を援護しようとしている日本の盲人はまだ数える程しかいないと言っていいだろう。

ところが、予想もしないところで、偉大な援護活動が展開されていることがわかった。この活動には、つい最近まで誰も気がついていなかったようだ。しかも場所が南米大陸のブラジル国なのである。ブラジルといえば、明治、大正生まれの人ならば、すぐに気がつかれることであろう。明治28年からブラジル移民が始まって、ちょうど今年が百周年記念の年。このブラジルに、東京都葛飾区で国際鍼灸専門学校を経営していた鬼木市次郎氏が、視覚障害者のための按摩師養成学校を設立したのである。そうしたことのいきさつについては次のような話がある。

鬼木氏の父母も国策に乗ってブラジル移民となったが期せずして、生まれた子どもの視力に障害があることに気がつき、急遽、出身地九州の親戚に子どもだけをあずけて盲学校に行かせたという。これが鬼木市次郎氏である。市次郎氏は盲学校を卒業してから、東京都の葛飾区に鬼木学園と称する按摩師鍼灸師の養成学校を設立した。後に名称を国際鍼灸専門学校としたが、経営を娘さんに譲り、数十年振りに父母の墓参のため、ブラジルに渡った。ところが、ブラジルでは日系二世三世



鬼木学園第一回卒業式に出席した井口理事

の盲人が、乞食同然の生活しているのに驚かされたという。どれほどの盲人がいるかは想像を絶するものがあり、事情調査したうえで、視覚障害者専門の按摩師鍼灸師養成学校の設立を考えたというのである。

日本からはブラジルだけでなく、チリ、ベネズエラ、エクアドルなどの国々へも多くの人々が移民した。最近、有名になったペルーのフジモリ大統領も日系二世であることは周知のとおりだが、これらの国々にも視覚障害者がたくさんいるそうだ。「いつだったか、フジモリ大統領のご母堂が腰が痛いというので、私が鍼灸治療をしたところ、すっかり全快してとても喜ばれ、私の学校も勢いづきました」と鬼木氏は話されていた。また、按摩、マッサージの技術を教える者がいないので、できれば日本から応援に来てほしい、と強く希望されている。たとえば、「日本の盲学校を定年退職された教師には年金がついているだろうが、それはそっくり日本に置いておき、手ぶらで、奥様と一緒にブラジルへ一年でも二年でも来てもらい、日系人の二世三世盲人に技術を教えて欲しいのです。生活費は全部、私にお任せください」とも言われるのである。

そこで、当協会は海外盲人援護事業の一環として、全国に呼びかけ、ブラジルとはどんな国か、そして、その国ではどんな生活をしているかなどを見聞することを含め、五月の連休を利用して、関心のある人々とともにブラジル国にでかけたのである。こうしたツアーは希望者がいれば、毎年でも続けたいと考えている。

国際ボランティア貯金 預金者代表団の現地視察

当協会は、ネパールにおける盲人援護事業を推進するため、平成3年より郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受けています。郵政省では、配分金を受けた事業を視察するため、毎年、同貯金の預金者代表を援助各国の事業地に派遣します。私たちの事業も、昨年11月に町田市長を団長とする代表団を現地に迎え、このモニタリングを受けました。



バラCBRセンターを訪れた預金者代表団

【カトマンズからバラへ】

同代表団は、11月5日(土)午前10時カトマンズのネパール盲人福祉協会(NAWB)点字出版所を訪問しました。出迎えたのは、当協会の佐々木秀明とNAWBアルジャー事務長およびアルジャー出版所所長を初めとする出版スタッフ6名。

一行はさっそく二階の会議室にて、NAWBの概要と点字出版事業に関する説明を受けました。そして、平成3年度の国際ボランティア貯金の補助金を受けて新築した出版所で、スタッフが日本製の足踏み製版機や電動印刷機を使い、点字教科書を次々に作成する様子を見学しました。

この日の午後2時30分、同代表団は佐々木の案内でカトマンズ空港からバラ郡のシマラ空港へ小型旅客機で向かいました。シマラ空港では、当協会の福山博とバラCBRセンターのゴータム所長がジープで出迎え、ホテルにチェックインした後、トラックや馬車で賑わうインド国境を視察しました。

【バラ郡でのフィールドワーク】

11月6日(日)午前9時、佐々木、福山両名の案内で同代表団はジープに分乗しバラCBRセンタ

ーを訪問しました。センターには、地元のカレーや町長を初めとする有力者やCBRのスタッフなど約40名が勢揃いし、一行を歓迎しました。そして、事業概要を説明し、CBRセンターを案内しました。その後一行は、視覚障害者援護事業の一環として、無利子の資金を受け雑貨店を営んでいる男性と、水牛を飼育している女性の自宅を訪問。厳しい環境の中、全盲の身でしっかり自活している二人を励ました。

午後12時15分、同代表団は乾季で水量が減った川をジープで渡河し、土煙の舞う悪路を抜け、ドゥマルワナ統合教育校に向かいました。同校は、バラ郡における統合教育の中心校で、平成六年度のボランティア貯金の補助金を受け寄宿舎を急ピッチで建設していました。一行は、盲児による歓迎の合唱に迎えられ、チョウダリ校長を初めとする学校関係者と同校における教育と日本の統合教育について、熱心に話し合いました。

今回の同代表団の訪問は、ボランティア貯金を受けた事業がどのように運営されているかモニターするためのものでした。しかし、当地では「因習の中で余り顧みられることのない障害者に、遠来の賓客が激励に来た」と捉えられ、大きな反響を呼びました。ネパールでは今もなお、障害者に対する理解が非常に低く、これが障害者援護事業や統合教育を進める上で大きなネックになっています。今回の訪問は、「他国では障害者も同じ人間として大事にされている」ことの証明になり、視覚障害者はもちろん、現地で地道に事業を展開している関係者を大いに鼓舞しました。

午後4時30分、3時間遅れで一行を乗せた飛行機は、シマラ空港からカトマンズへ向かって飛び立ちました。

統合教育と寄宿舎

Integrated Education and Hostel for Blind Children

ネパールの視覚障害児のうち、6歳から15歳までの就学適齢児童は3万人とされています。このうち就学の機会を得ている盲児はわずかに300人で、トリブバン大学の実験学校で統合教育が開始されてからすでに30年が経過したにもかかわらず、障害児教育はなかなか進展を見せません。しかも300人という数字は、本来教育文化省が行うべき事業を私たちが先行的に代行し、努力を重ねてきた結果なのです。こうした普及遅延の背景には、教育費の不足、一般教育の普及の低さ、因習の中での否定的な障害者観など様々な要素が挙げられます。しかし、私たちが直面している問題はもっと身近なことです。

現在、視覚障害児の統合教育を実施している学校は全国で27校を数えます。しかし、寄宿舎を備えている学校は都市部に集中しているため、地方の盲児にとって就学の機会を得ることは極めて困難です。また、地方の統合教育の場合、盲児の家庭の貧しさから、通学時の送り迎えや衣服を揃えるなどの経済的な問題があり、家族が積極的に教育を受けさせる余裕がないのです。私たちは農村地域でこそ教育の普及が推進されなければならないという考えから、寄宿舎を完備した統合教育校の開発に乗り出しています。

副首相を迎えて落成式挙行 ㊦

ドゥマルワナ校は、1年生から10年生まで1,100人を抱えるパラ郡でも有数の規模を持つ学校で、拠点統合教育校として私たちが最初に取り組んだ



盲児を励ますネパール国副首相



完成したドゥマルワナ校寄宿舎

学校です。現在12名の盲児が寄宿舎生活をしながら勉学に励んでいます。今までは空き教室にベッドを持ち込んでの共同生活で、トイレもシャワーもない不便な生活を強いられていました。そこで、盲児たちの生活・学習環境を改善すべく、郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受けて学校敷地内に寄宿舎を新築しました。男子寝室、女子寝室、学習室、食堂、台所、トイレ・シャワー室、宿直室を完備した1階建ての瀟灑な建物です。この地はインド国境沿いに広がる、典型的な亜熱帯地域で、特に雨季の暑さは耐え難いものがあります。このため寄宿舎には、扇風機も備え付けました。

5月31日に落成式を挙行了しましたが、この寄宿舎の完成を心待ちにしていた盲児たちの喜びようは大変なものでした。落成式にはネパールの副首相で外務兼国防大臣、森林保全・環境大臣などの臨席の下に、行政・学校・C B R関係者、地元住民が出席したものですから、学校周辺の集落は大騒ぎとなりました。形はどうあれ、視覚障害児教育の一コマが一般住民の関心の的となったことは、今後の私たちの活動推進に良い影響を与えることと思います。

昨年私たちはギターやキーボード、コンゴなどの楽器を購入し盲児たちに提供しました。ネパールの盲児たちはとても歌が好きで、しかも上手です。これからは、新しい寄宿舎で平原に沈む夕陽を背にネパールの民謡を奏でることでしょう。

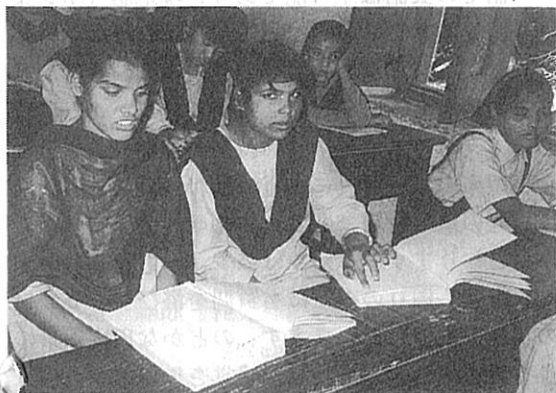
✎ 釈迦生誕の地ルンビニで統合教育 ✎

カトマンズから車で約7時間、ルンビニ県ルパディヒ郡のシャンチ統合教育校を訪れました。ルンビニと言えば釈迦生誕の聖地としてあまりにも有名です。この地もパラ郡同様、インド国境に近いタライ平野のおだやかな田園地帯です。

昨年、私たちはシャンチ高校の統合教育を支援してきました。NAWB事務長であるアルヤール氏はこの学校の卒業生で、しかも現職に就くまでの約10年間、英語教師として教鞭をとっていたということです。彼は6年前にこの高校に統合教育を導入しました。生徒数は1,100人。盲児は全部で11名で、寄宿生が8名、通学生が3名です。

私たちは2名の盲児が学んでいる6年の英語のクラスを見学しました。彼女たちは2人とも通学生ですが、この地で視覚障害児が6年間通学するのは並大抵のことではありません。点字の教科書を音読したり、教師の質問に答える様子から、彼女たちの勉学に対する意欲と、この学校の障害児教育に対する熱意を感じ取ることができました。1年生や2年生は点字の勉強をしていました。その無邪気で明るい授業風景は、私たちに清々しささえ感じさせます。ただ、1年生で自閉症的な盲児がおり、担当教師は、この子の心を開かせるのにどうしたら良いか悩んでいるようです。

校長先生はインド留学時代に盲学生と一緒に学んだ経験があるとのことで大変理解があり、積極的に盲児の教育に取り組んでいるようです。また担当教師も熱心で、他の教師たちも協力的です。盲児を受け入れた当初は、晴眼児が盲児をいじめるのではないかと心配したそうですが、先生たちが率先して盲児の手を引いたり面倒を見たりした



晴眼児と一緒に学ぶ盲児童



ので生徒もそれを見習うようになったとのことでした。

盲児が増えたこともあって、統合教育担当教師は点字器の不足や点字指導専門教師の必要性を訴えていました。また、この学校の寄宿舎も空き教室を使用しています。最終的に25名ほどの盲児を受け入れる計画なので、近い将来寄宿舎の整備を行う必要に迫られると思います。

釈迦生誕の地ルンビニで、困難にめげず勉学に励む盲児たちの健やかな成長を願わずにはおれません。

☔ 洪水に見舞われたジュダ校 ☔

ジュダ高校があるロータート郡ゴール町は一昨年史上空前の大洪水に見舞われたため、私たちもこの地を訪れ、直接障害者のかたがたを見舞いました。ジュダ高校も被害を受け、現在寄宿舎として使用している部屋は1.5メートルまで浸水したということで、今なおその痕跡があらわに残っています。

この学校は、今年から私たちの援助で寄宿制の統合教育を開始し、4名の盲児を受け入れました。以前は2名の盲児が通学していましたが、やはり通学時の手引きの問題などで学校をやめてしまったとのこと。ジュダ高校は講堂もある全校生徒1,600人の立派な学校ですが、盲児のための寄宿舎は自転車などを入れておく倉庫のような部屋で、採光も悪く非常に粗末なものです。しかもこの地は雨季になると、必ずといっていいほど水害に見舞われるところなのですが、寄宿舎はこれに対して何の対策も立てられていません。こんなことが影響しているのか、盲児たちにも何となく活気が感じられません。彼らの生活・学習意欲を掻き立てるためにも環境の整備が必要です。

バラ C B R の成果

The Progress of Bara CBR

1989年に開始された、バラ郡における視覚障害者のための C B R は、この6月で6年が経過しました。NAWB、C B R スタッフ、当協会の地道な努力によって今やネパールではモデル C B R として高い評価を受けています。私たちはこの成果を踏まえて、ネパール社会福祉協議会（SWC）と継続して協定を結び、この7月から3年間の計画でフォローアップの最終プログラムに入ります。

プロジェクト開始当初は、インド国境沿いの農村地帯であるバラ郡を、視覚障害の分野でどのように開発していくのか、些か不安がありました。しかし、今や地域的にはバラ郡全域（105カ村）をカバー、リハビリテーションだけでなく視覚障害児教育や眼科診療、ビタミンA配布による失明予防など、多岐にわたるプログラムを展開するに至っています。

🔦 眼科助手と失明予防 🔦

C B R センターに併設されている眼科診療所には現在4名の眼科助手が常駐し、毎日ローテーションを組みながら患者の診療に当たっています。彼らはトリブバン大学医学部で眼科助手の研修を受けた優秀なフィールド・ワーカーです。バラ郡は白内障、ビタミンA欠乏症、トラコーマなどによる失明が後を絶たず、ネパールの中でも最も失明率の高いところとして知られています。この眼科診療所が開設されるまでは、近くに病院もなく、病院にかかるお金もなく、目の病気にかかっても放置されたままの状況でした。今は眼科医の定期的な無料診療と、眼科助手による無料診療によって地域住民は自由に診察を受けることができるよ



眼科助手による巡回学校検診

うになりました。噂を聞きつけて国境を越えたインドからもたくさんの患者が駆けつけているようです。患者は多い時で150人、少ないときで30人ほど。年間約7,000人が受診しています。

C B R センターでは、定期的に失明防止講習会やビタミンA講習会を開催していますが、今年からバラ郡にある学校を巡回し、教師や生徒を対象にビタミンAを含む食物や眼疾患に関する知識を中心とした講習会を開いています。講師はもちろん4人の眼科助手です。彼らは C B R 開始当初から働いており、この地域の福祉を自らのものとして考えている意欲的なスタッフです。この地から失明を根絶するために、彼らの力が大きな原動力となるに違いありません。



🔦 フィールド・ワーク 🔦

私たちは、村に入って盲人の家庭を訪問し、インタビューによって評価作業を行っています。村人の多くは学校教育を受けたことがないので、ネパール語での会話は不可能であり、現地語（ボジュプリ語）をネパール語に通訳しなければなりません。しかも、私たちの質問項目に本人はおろか家族も確信をもって答えることができないことが多く、インタビューには長い時間がかかります。また、娯楽のない村人にとって私たち外国人の訪問は格好の娯楽材料であるため、周りは黒山の人だかりとなります。私たちは多少うんざりしながらも忍耐強く周りの人々にも質問を浴びせ、その村の状況を把握していきます。のどかな田園風景に身を置いてしまうと時間の感覚を失い、つい、日の暮れるのも忘れてしまいます。



水汲みに精を出す盲人

② 蛍と星と ☆

ある村でのこと。いつものように盲人の家を訪ねた。彼は家には居ず、農作業の手伝いをしているということで、私たちはその現場まで行ってみることにした。ところがその作業場は、村のはずれにあり、どうしても小川を渡らなければ辿り着けない。橋など架かっていないので、村のひとたちは腰まで浸かってこの川を渡っている。私たちにはそんな勇気もないので、飛び越えることができるところまで迂回するしか手がない。この日のフィールドワークはこの盲人で3人目。すでに夕方の気配が漂っている。私たちはやっとの思いで目指す盲人に面会し話を聞く。

「はしか」で2歳のときに失明したこと。訓練によって他人の手を借りずに外出が自由になり、農作業もはかどるようになったこと。水牛の飼育を望んでいること。そして何よりも家族や周囲の人々の見る目が変わり、喜んでいることなど。

車座になって訓練の成果に耳を傾けていると、太陽はいつの間にか沈み、薄闇が辺りを包んでいる。ぼちぼち…と腰を上げたときには、すでに辺りは漆黒の闇。道々、現地のスタッフが「ガサッ」という音に敏感になっているのを何げなく尋ねると「この辺りにはコブラがいるのでね、でも今はカエルだと思うな」と一人で納得している様子。「ここは盗賊がよく出るところなのだよ」と別のスタッフ。(来る前は、そんなこと一言も言ってくれなかったじゃないか)とつぶやいてみても素知らぬ顔。不安を抱えながら例の川に差しかかる。私たちは慎重に川筋を確かめながら横切ることになる。ここを越えれば一安心、と思って川を飛び越えた瞬間、点滅する無数の光が私たちの眼前に

飛び込んで来た。蛍である。突然、宇宙的な広がりを感じて天を仰ぐと満天に無数の星。

かくして闇の中の蛍と星の競演は、私たちに自然の美しさとダイナミズムを実感させてくれることになる。

③ 竹登りをする元気印盲人

それにしても、村の中でたくましく生活している盲人をみると、たいへん愉快的気持ちになる。すでに共同体の中で、単純ながら何らかの仕事をこなしている盲人は、訓練によってますますその能力を伸ばしていく。「喧嘩なら誰にも負けない」と豪語する元気印の盲人を紹介しよう。

ヤダブさん、33歳。10歳のとき「はしか」で失明。この地では下痢や熱病が日常的な疾患であり、病名としての「はしか」は失明原因としてもかなり多い。訓練期間は10カ月であるが、もはやサポートの必要なく歩行、日常生活、仕事をこなしていくことが可能である。水牛の世話などは軽々とこなす。飼葉を刻み、水を汲み、水牛に与える。竹製の白杖を巧みに使いながら、凄まじい勢いで畦道を難なく歩いて行く。追いつけるだけでたくさんになってしまうほどだ。日課として、500メートル先の竹林まで筐(水牛の餌)を集めに行くのだが、彼の妙技は木登りならぬ竹登りである。あっと言う間に竹に登り、しなる枝に足を挟み、しなやかな動きで筐を見事に集めていく。そして最後に、集めた筐の塊を見当をつけてストンと地に落とし、降りて来てその筐を拾うのである。どの地点に落としたかも熟知しているようで、その動きには超人的なもののさえ感じられる。

かくして元気印の盲人は訓練の成果あって、集落の中で遅く自立の道を歩みはじめるのである。私たちは、ネパールの村を訪れるたびに、失ってしまった何かを思い出し、「勇氣」という二文字に想いを馳せるのである。



ブラジル鬼木学園の卒業式

Helen Keller Study Tour to Brazil

サンパウロに、鬼木東洋医療専門学校という視覚障害者のための鍼灸マッサージ師の養成施設がある。これは全盲の鬼木市次郎氏が単身「渡伯」し、私財を投じて設立したもの。本年5月2日に、その学校の第1回の卒業式があり、当協会はそれに参列しブラジルで孤軍奮闘する鬼木氏を労い、卒業生を励ますため視覚障害者のツアーを企画した。



卒業式で優等生を表彰する鬼木理事長

ブラジルは遠い

直居 鉄

ブラジルは遠い。4月29日午後7時に成田を飛び立って9時間40分でロサンゼルス着、空港ロビーで2時間、給油待ち合わせ、再び同じ飛行機の最後尾の狭い座席に座り込み、11時間20分かかってようやくサンパウロに30日の朝5時50分に予定通り着陸した。暦の上では出発してから11時間しかたっていないのに、実際は23時間もかかっていた。80歳を越えた鬼木先生が、日本とブラジルを年に何回も往復しておられるとは驚きだ。空港ビルを出て、15度ぐらいのひんやりした秋晴れの空気を、思いきり呼吸する。昨日は、東京も汗ばむほどの天候だったので、地球の裏側まで来たという実感が無い。一行24人は、専用バスで市内を回る。日曜日なので道路はすいており、商店は皆休みであるが、その代わりにあちらこちらに露店の市場ができて、賑やかな音楽といろいろな食べ物の匂いや大勢の人声が楽しそうだ。サントスやリオデジャネイロの市内や、大西洋海岸の強い日差しと波の音、これだけの水量が、一体どこからどこへいくのかと、あまりの壮大さにただただ圧倒

されたイグアスの滝、そしてブラジルの酒ピンカを飲みながらたっぷり食べた焼肉シラスコなど楽しいことばかりであった。

詳しく調べる余裕もなく、推測でしかないが、視覚障害者の社会的自立などは、ほとんど考えられないような状況の中で、3年前に鬼木先生が独力で創設され、悪戦苦闘を続けられてようやく迎えた、東洋医療専門学校の第1回卒業式に参列したときの感動は大きかった。11人の若い視覚障害者たちが日本式のあん摩術を習得して、差別と偏見、無理解と障害が待ち受ける実社会に出ていこうとしている。彼らをわが子のように、暖かく励ます鬼木先生ご夫妻の様子を目の当たりにして、私たちも何かをしなければならぬと痛感した。

2カ月以上も移民船に揺られてようやく辿り着いた新天地ブラジルで築き上げた日本人の生活と文化が生きずく社会で、視覚障害者がまず今の私たちと同じような社会生活ができるようになるために、ブラジルは遠い国だと知らん顔をしてはいられないと思いながら、リオデジャネイロから29時間かかってようやく成田に帰ってきた。



卒業生を激励するツアー参加者代表



コパカバーナ海岸でのツアーグループ

ブラジル・スタディーツアーに参加して

加藤 晃

世界中に100カ所の地点を選び、各に必ず自作の俳句・短歌・漢詩を1首ずつ挿入した短い紀行文集、随所10題の取材旅行も日本国内は47都道府県全てを回っている。一方世界漫遊の方は大きくブロック分けして、ヨーロッパではイギリス・フランス・イタリア、アフリカはエジプト、中東はイスラエル、アジアでは中国・韓国・台湾・タイ・シンガポール、北米ではニューヨーク・ハワイを巡っている。残るは南米とオセアニアだけだったが、今回のブラジル旅行で南米も終わった。

主催者の目的は新しく盲人のために建てられた東洋医療専門学校の最初の卒業式に参列することのようだったが、私の関心事は世界三大瀑布の一つであるイグアスの滝の観光にあった。

サンパウロ滞在の第4日目がその日であった。早朝ホテルを出発し、サンパウロ空港からイグアスへ飛び、さらにバスで国立公園前に着いたときすでに11時ちょっと前だった。ゲートの脇の草むらにアライグマが数匹我々を歓迎するようにこちらへ向いていると手引きの姪は言う。

アライグマもえさ欲しげなり秋の滝

ゲートを抜け、階段を下ると水音が聞こえ始め降りきったところは滝壺の岸辺だった。滝壺といっても滝幅が4kmもあるのだから細長い滝池というべきであろうか。ガードレールのついた遊歩道があり、滝の中心部は「悪魔の喉」とあだ名され、それに向かって栈橋もできている。私と姪はしぶきに濡れながら先端までいった。

大小の飛竜連なるイグアスの

滝の要は悪魔の喉笛



地球の裏側ブラジル

当津 純一

地球儀を日本の方から半回転すると、頭の右側が膨らんだオタマジャクシの様な形をした南米大陸がある。その膨らんだ部分にある日本の23倍もある大国ブラジルへのツアー（東京ヘレン・ケラー協会企画）に参加した。

成田から実際には約24時間であるのに、機内で晩飯の後の仮眠と朝食を2回繰り返したため、2日経過した様な感じでサンパウロに着いた。

サンパウロ市内に宿泊して鬼木専門学校の卒業式への参加、東へ約80キロのサントス港、西へ約1200キロのイグアスの滝、そして最終日には東北約600キロにあるリオデジャネイロ市を廻り、そのままサンパウロ空港を経て帰国した。

南回帰線付近に位置する所だけ巡ったので、過酷なアマゾン流域のことはわからないが、休日のサントスの海辺は老若男女で一杯であり、働きの町サンパウロの夕暮れには点在する開放的な酒場（バル）が賑わっていた。リオのサンバ広場



鬼木東洋医療専門学校

やレストランでは元気な子供たちの声があった。帰りの機内では、日本で働いている親兄弟思いの日系青年とも話をした。

ブラジルは途方もないインフレに悩まされていると聞いていたが、現在は1ドル=0.88レアルで、日用品や食料品の物価も安定している。最近リオ市の沖に油田も発掘されており、ブラジルは再び日本が羨む国へと発展することが想像される。

地球儀を日本の方へ戻してみると、ブラジルと似た形をした大国の中国が隣にある。この両大国は日本との関係も深い、両国の発展に対して多くの面で、より一層の協力をしていくことが、これからの日本にとっても大切なことではないかと思う。日本の視覚障害者の環境は決して満足のいくものではないが、83歳で盲目の鬼木先生がブラジルで理療を、また中国では日本の若い女性が同じ視覚障害者に日本語を教えていることも聞く。

これらの活動が発展して、成功することを祈念したい。

ブラジル・ツアー旅程表

1995年(H.7) 4月29日(土)	成田19:00発(RG-835) ロサンジェルス12:40着(トランジット) ロサンジェルス14:30発(RG-835)
30日(日)	サンパウロ05:50着、市内観光 鬼木東洋医療専門学校訪問
5月1日(月)	専用バスによりサントス市内観光
2日(火)	鬼木東洋医療専門学校:第一回卒業式に出席
3日(水)	サンパウロ09:15発(RG-942)⇒イグアス10:55着 (イグアス大瀑布観光) イグアス17:15発(RG-943)⇒サンパウロ18:45着
4日(木)	サンパウロ07:15発(RG-314) リオデジャネイロ08:10着、市内観光 リオデジャネイロ22:20発(RG-8834) サンパウロ23:20着(トランジット)
5日(金)	サンパウロ00:10発(RG-834) ロサンジェルス07:00着(トランジット) ロサンジェルス09:50発(RG-834)
6日(土)	成田13:10着
※本ツアーの宿泊はすべて NIKKEY PALACE HOTEL, São Paulo	

ブラジル・ツアー参加者リスト

《部屋割順》

- 【1】竹田功(福島、全盲) 【2】前田忠男(福島、弱視)
 【3】井出国男(新潟、全盲) 【4】井出イミ子(新潟)
 【5】佐々木信(北海道、全盲) 【6】佐々木玲子(北海道、全盲)
 【7】栗本久雄(群馬、全盲) 【8】栗本梯子(群馬)
 【9】加藤晃(愛知、全盲) 【10】山本恭子(愛知)
 【11】中嶋千代志(岩手、弱視) 【12】中嶋しずえ(岩手、弱視)
 【13】当津純一(東京、全盲) 【14】当津順子(東京)
 【15】大橋東洋彦(京都、全盲) 【16】井口立己(埼玉)
 【17】佐藤弘子(愛知、全盲) 【18】菅原温子(東京)
 【19】井口淳(協会理事、全盲) 【20】井口美佐子(東京)
 【21】小林信(東京、聾者) 【22】直居鉄(東京、全盲)
 【23】福山博(協会職員) 【24】小松浩之(添乗員)

湖畔の大ダ

Helen Keller Stu

当協会のネパールにおける活動を視察し、あわせて「日」も今回で4回目となった。現地の旅行社によると「日」期待に応えた訳では無いが、深刻な話は昼間だけにして、

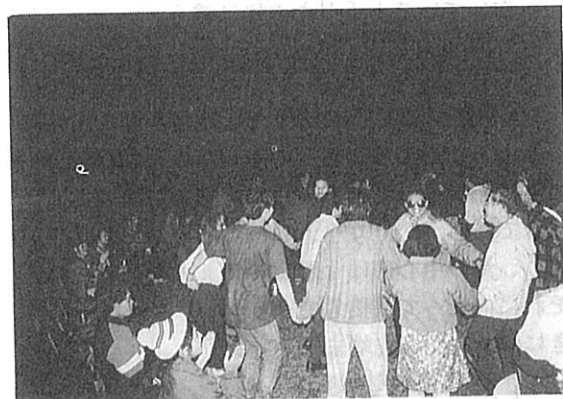
ポカラの一日

松岡 義人

12月29日、旅程5日目の朝「コン・コン・コン」とドアをノックする音で目が覚めた。それは念願のヒマラヤが見えるという良い知らせの合図だった。私は身支度もそこそこにカメラ片手にロッジの庭に出た。やや曇り空とはいえ目の前に広がるヒマラヤの山並み、朝日によって浮かび出た稜線はペワ湖に映ってとても神秘的な眺めであった。

午前9時、NAWB/NABトレッキング・グループの皆さんと合流して、トレッキング開始地点のチョレ・パタンを出発。途中数回の休憩によりネパールの自然を全身に感じながら、お昼前には参加者全員がヒマラヤが良く見えるチサパニ・ダラ(冷水の丘)に到着。今回のツアーで一番楽しみにしていたトレッキングが好天に恵まれたので、みんな大満足であった。

夜はペワ湖畔でキャンプ・ファイヤー。それにしても師走のキャンプ・ファイヤーは滅多なことで体験出来るものではない。この日同行のシェルパの皆さんご自慢の心尽くしの料理に舌鼓を打ち、宿泊ホテル専属の楽団の演奏と舞踏団の歌と踊りに、私たちも加わって大ダンス・パーティになって夜のふけるのも忘れるほどだった。特に、



ペワ湖畔でのキャンプファイヤー

「スパーティ

「Tour to Nepal

「双方の視覚障害者の交流を目的にしたネパール・ツアー。盲人は陽気なので、誰もがガイドをやりたいがる」という。それは湯気が出るほどのダンス、ダンス、ダンスであった。

ドゥルバさんに教えてもらったネパール・ソング「レッスン・ピーリーリー」の旋律は今も耳に残っている。

ところで30年前、鳥取大学医学部の岩村昇さんとの出会いがきっかけで知ったネパールに、いつの日か訪ねたいと思っていた夢が、東京ヘレン・ケラー協会のお世話で実現したことは大変感謝である。弁護士になるための勉強をしているダカーさんや、ネパールの子どもたちに日本語を教えているシャムさん等々、ネパールの文化を大切にしながら明日への国作りを目指している沢山の人たちに出会えたことは、「みんなで生きる」ことの誠の意味を教えられた旅であった。再び出かける日のために、更なる準備をしなければと思うこのごろである。

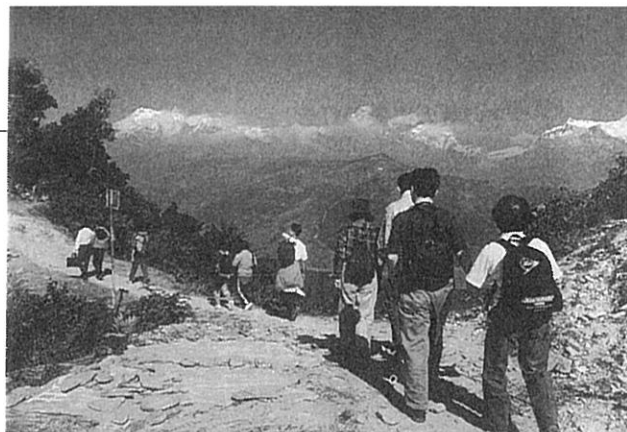
ネパールで会った盲人たち

日本点字図書館 河井久美子

ヒマラヤを背後に控えながら、12月のネパールは思いのほか暖かく、澄みきった青空の下、私たちはネパール関係者の親しみのこもった笑顔に迎えられた。

私たち一行は、東京ヘレン・ケラー協会が企画した『ネパール/バンコク楽々スタディーツアー』に参加し、12月25日に成田を発ってバンコクに一泊した後、ようやくカトマンドゥ（カトマンズ）の空港に着いたのだった。一行24名中全盲・弱視の視覚障害者は14名、ほとんどのメンバーがネパールは初めてである。

広々とした郊外の空港からバスで市街に入るとそこは多くの人の行き交う喧噪と絶え間のないクラクション、まさしくこれがカトマンドゥの音なのだそう。盲人用信号はおろか、普通の信号さえほとんどない。舗道にも煉瓦や石ころがころがっていたり、穴ぼこや段差があって、この大勢の人



マチャブチャレを仰ぎながらトレッキングと車の流れの中、視覚障害者にはたいへん歩きにくいように思える。

最初にNAWB(ネパール盲人福祉協会: Nepal Association for the Welfare of the Blind)を訪ねた。ここでネパールの視覚障害者の数を尋ねたところ、37万人、ただし資料によって70万だったり10万だったりするという。数の多さにもびっくりしたが、数に幅がありすぎたのにも驚いた。このような数字のあいまいさには、この先ずうっと驚かされ続けることになる。

NAWB訪問の帰り道、NAB(ネパール盲人協会: Nepal Association of the Blind)の招きを受けた。日が落ちると、急激に気温が下がり冷えてくる。ちょうど2時間の定期的な停電の最中で、暗い中を懇親会場の屋上まで階段を上る私たちに、住人たちが階段の踊り場でろうそくを照らしてくれた。この盲人協会のメンバーの多くは学校の先生で、自分たちの手でこのような組織を作っていることに誇りをもっているようだった。やはり、視覚障害者の職業問題について気になるらしく、日本では弁護士になる盲人が多いようだが、などという質問が出た。

この会場には女性の視覚障害者は見当らなかったが、翌日訪問したアダーシャ中学校には全盲の



NAWBを訪問するツアーグループ



女性教師サヒタ先生がいた。ここは統合教育を行っており、彼女は道徳を教えているという。私たちに、低学年向きの訓話をひとつ披露してくれた。このサヒタ先生も、前日会った盲人協会のメンバーもネパールではたいへんなエリートたちなのだろう。お菓子工場でチョコレートの包装やパッケージングをしている盲人もいると聞いたが、そういう仕事さえなく悲惨な状況に置かれている視覚障害者が多数いるにちがいない。

ボカラ（カトマンドゥから車で6時間）でのトレッキングに同行してくれた全盲のドゥルバさんとダカールさんは2人とも学生だった。ドゥルバさんの方は日本語を少し習っていて、教科書に出てきそうな日本語の文章を時々口にする。ちょっと素敵な顔をしていて、そのせいかどうか女友達がときどき家へ来て食事を作ってくれる、なんて言っていた。ネパールの私立学校では英語で講義をするところも多いとのことで、私たちが接した視覚障害者は英語を不自由なく話していた。キャンプファイアで会ったクマルさんは29歳、N A W Bの理事で高校の英語教師をしている。彼は3台のバスを乗り継いで通っているという。とても積極的な人で、日本の視覚障害者施設についていろいろ尋ねていた。ネパールには折りたたみ式の白杖がないと言って直杖を使っていたが、この直杖は70ルピー（150円）程度で手にはいるそうだ。

ここはともかく物価が安い。100万円もあれば学校が建つ。今回ボカラで訪れたアマルシン高校も、数年前ヘレン・ケラー協会の人たちが訪ねたときには、屋根がこわれかかっているような有様で、そのみずばらしさに思わず涙したというが、現在はきれいな建物になっていて10数人の男女盲生徒が学んでいた。日本やドイツの援助により、このように入れものは立派になっているが、今後



は物質的援助だけでなく、今回出会った視覚障害者たちが指導者として十分活動できるように手助けしていく必要があると感じさせられた。

（「ってんフォーラム」14号1995年冬号より）

ネパール・ツアー旅程表

1994年(H.6) 12月25日(日)	成田19:00発(TG-673)⇒バンコック23:30着 バンコック:AMARI AIRPORT HOTEL泊
26日(月)	バンコック10:55発(TG-311)⇒カトマンズ12:55着 カトマンズN A W BおよびN A B訪問 (YAK & YETI PARKROYAL泊)
27日(火)	バクタプル観光 アダーシャ統合教育校訪問 H K I (ヘルンター・インターナショナル)カブレC B R訪問 (YAK & YETI PARKROYAL泊)
28日(水)	専用バスでボカラへ アマルシン統合教育校訪問 (FISH TAIL LODGE泊)
29日(木)	チサパニダラ(冷水丘)へトレッキング (FISH TAIL LODGE泊)
30日(金)	空路カトマンズへ、その後バスで山岳リゾートへ (MALLA ALPINE REZORT泊)
31日(土)	カトマンズ市内へ、その後市内観光 (YAK & YETI PARKROYAL泊)
1995年(H.7) 1月1日(日)	バシュパティナート寺院等カトマンズ市内観光 (YAK & YETI PARKROYAL泊)
2日(月)	カトマンズ13:55発(TG-312)⇒バンコック18:15着 (THE MENAM RIVERSIDE HOTEL泊)
3日(火)	タイ盲人援護財団/タイ・ライトハウス訪問 バンコック市内観光 (THE MENAM RIVERSIDE HOTEL泊)
4日(水)	バンコック07:55発(TG-672) 成田着15:55

※ネパール・ツアー参加者リスト※

《部屋割順》

- 【1】竹田功(福島、全盲) 【2】前田忠男(福島、弱視)
- 【3】吉田勉(東京、全盲) 【4】伊藤東洋雄(神奈川、弱視)
- 【5】古市薫(福島、全盲) 【6】坂入隆(東京、弱視)
- 【7】田辺建雄(石川、全盲)【8】森川政之衛(東京、弱視)
- 【9】高橋恵子(千葉、全盲)【10】河井久美子(東京)
- 【11】石川純子(福岡、全盲)【12】菅原温子(東京)
- 【13】当津純一(東京、全盲)【14】当津順子(東京)
- 【15】巻島完次(栃木、全盲)【16】巻島久子(栃木)
- 【17】松岡義人(鳥取、弱視)【18】松岡朋子(鳥取)
- 【19】西牟田季子(千葉) 【20】増野幸子(東京)
- 【21】小林信(東京、聾者) 【22】佐々木秀明(協会職員)
- 【23】北條昇(協会職員) 【24】福山博(協会職員)
- 【25】小松浩之(添乗員)

ネパール盲人福祉協会でのボランティア活動

1994

平成6年11月9日、ついにカトマンズに着いた。そして「何だコリヤ？」と思った。到着が午後8時を過ぎていたせいか、トリブバン国際空港は人氣がなくガランとしている。パスポートにスタンプを押してもらって外に出ると、チップ目当ての子供がスーツケースを引っ張る。東京ヘレンケラー協会(THKA)の佐々木さんに、ネパール盲人福祉協会(NAWB)のアルヤール教育課長(現在事務長)を紹介され、赤いレンゲの首飾りをかけてもらう。とても嬉しい。それにしてもネパールは、テレビで見た秘境スペシャルの世界。なんだか、すごい所に私は来てしまったようだ。

NAWBの建物はどっしりとしたレンガ造りでとてもきれいだ。銘板に「日本のボランティア貯金の援助で建てられた」とあり、少しだけれど貯金している私は何だか嬉しくなった。事前の打ち合わせでは、日本で研修を受けたことのあるアルヤールさんが日本語の授業を進め、私は彼のアシスタントを務めるはずだった。ところが、実際に始めてみると彼も生徒のような顔をして席についている。しばらく「えー」とか「あー」とか言って、お互いにニコニコしていたけど、思い切って「何をしましょう？」と聞いてみると「何でもいよ」とのこと。そこで、とりあえず「あいさつ」から始めた。

生徒は、NAWBの職員と盲人学生、そして統合教育校の先生。当初は見物人も含めて20名近くいた。しかし、授業が進むに連れて、クシの歯が欠けるように少なくなった。やめる理由は「英語が解らないから」というのが多く、私はとても悲しかった。片言のネパール語を混ぜてはみたが、日本語の授業を私は英語で行っていたのだ。また、盲人の生徒のために点字のテキストを半分しか作ることができなかったことも反省材料だ。もっと早く思いついていたらと、残念である。このような訳で5カ月後には生徒は6人になってしまった。しかし、残った人はとても熱心で、長い間よくついて来てくれたと思う。

この間「洗礼」と言う名の強烈な食あたりにあった。つらくて泣いた日やカルチャーギャップで不愉快なことも多かったが、ヘレンケラーツアーと一緒にトレッキングをしたり、知り合いの結婚式

日本語教師ボランティア 寺内 貴代



生徒から感謝のティカを受ける寺内さん

に招かれたり、楽しい思い出も沢山ある。ネパールで知りあった人々、特にアルヤールさんのご家族は信じられないほど親切で、苦しい時とても良くしてもらった。日本では当たり前だと思っていたお湯の出るシャワーや家電製品、日々の食事などあらゆるものが、とても贅沢なものであることも知った。シャワーは週に1度、食事は毎日ダルバート、暖房は一切無く断水がしばしばという日々だったが、快適だった。そして何よりもネパールの人々の生活と文化を目近かで見る事ができた。お金には替えられない経験ばかりの毎日を送らせてもらった。もちろん日本では決してできない苦しい経験も含めて。

最後に、これらのチャンスを与えてくださったTHKAの皆様と、電話口で「あなた帰ってこなくていいわよ。家が狭いんだから」という冗談で励ましてくれた家族に深く感謝します。

寺内さんは、オーストラリアのカレッジを卒業後、当協会のボランティアとして自費でネパールに渡り、NAWBで5カ月間日本語を教えてくださいました。また、点字に関する知識のないままネパール入りしたにもかかわらず、現地で勉強し盲人スタッフに日本語点字を指導したり、点字出版の仕事まで積極的にしかも根気よく活動してくださいました。彼女にとってネパールは初めての国で大変なご苦労もあったはずですが、現地の風習を理解し、現地流に生活しようと努めたことが、折に触れて書き綴った文章から見て取ることができます。彼女が果たしたネパールとのすばらしい交流に事務局一同感謝申し上げます。

点字教科書と技術移転



NAWB(ネパール盲人福祉協会)点字出版所では、点字教科書を製作し全国27の統合教育校で学ぶ300名の盲児に配布しています。製作は順調に続けられておりますが、盲児の教育にとって欠くことのできない大事な事業でるだけに、技術の向上は大変気になるところです。今後、統合教育校も増加するであろうし、高校教育課程の中での図版の必要性も高まってくると思われます。

1987年以来、ネパール人スタッフの日本研修や当協会スタッフの技術指導によって、基礎的な製作技術は移転することができました。しかし、印刷機など機器類の保守になると、機械技術専門家の不在もあり、なかなか思うに任せないのが現状です。そこで、当協会の点字技術専門スタッフが技術指導時に、専門的な機器の保守・点検も兼ねておこなっています。専門スタッフは、「単純な保守の部分でもまだ身についていない部分があり、機器に対する日常的な配慮が大切だ」と言っています。また、印刷、製本についても自己流の部分が多少残っており、改善の必要があるようです。

幸い今年度は、ネパール人スタッフの日本研修が実施される予定です。研修生は、今年から出版・教育課長に就任したキラン氏です。彼は、これまで製版士として教科書製作に携わってきたベテランで、事務長のアルヤール氏とともに統合教育講習会の講師を務めてきた特殊教育の指導者です。この時期の技術研修にはうってつけの人物と思われます。この研修を成功させ、ネパールに日本の点字製作技術が完全な形で移転されるよう努力したいと思います。

AID PROJECT IN NEPAL FISCAL 1994

INTEGRATED EDUCATION

(translated from page 4)

There are about 30,000 blind children aged between 6 and 15 in Nepal. Among them there are only 300 children who are given opportunities to go to school. Education for blind children has not spread very much. These 300 children going to school resulted in our constant effort to develop the education. There are different factors of the slow spread integrated education. They are a shortage of education expenditure, the low spread of general education and negative view of the impaired under long-established custom. However, the problems we are facing are rather regional.

At present there are 27 schools across the country which are having integrated education. However, it is difficult for blind children living in a rural area to gain opportunities to go to school since schools with a hostel are centralized in an urban area. We are developing integrated education schools with a hostel in a rural area so that education spreads there.

NEW HOSTEL FOR BLIND CHILDREN

(translated from page 4)

Nepal Rastriya Secondary School, Dumarwana (Dumarwana Secondary School), is a fairly large school in Bara District which has more than 1,100 students from 1st grade to 10th grade. This school is a first integrated boarding school we have developed.

At present 12 blind children are living and studying there. They had brought beds in a vacant classroom and made an uncomfortable life there without a bathroom before we built a new hostel in the school site with financial support given by the Postal Savings for International Voluntary Aid of Japanese Ministry of Posts and Telecommunication. This hostel is a clean building of one-story with fans installed and has boy's bedroom, girl's bedroom, a studying room, a kitchen, a dining room, a bathroom and a boarding room.

On May 31st there was an inaugural ceremony attended by Deputy Prime Minister and Minister for Foreign Affairs and Defense, State Minister for Forest and Environment, other dignitaries from Parliament, local District, School administration, Bara CBR Project Office and NAWB. Then local people were as excited as the blind children who had been waiting for the hostel. This event drew attention from people in general and raised their awareness of integrated education.

INTEGRATED EDUCATION IN LUMBINI

(translated from page 5)

We visited Shanti Secondary School in Rupandehi District in Lumbini Zone we started supporting last year. Mr. Aryal, Chief Administrator of NAWB (Nepal Association for the Welfare of the Blind) graduated and had been working there as an English teacher for about 10 years. There are 1,100 students and 11 blind students (8 boarding school students and 3 day school students). We felt a strong enthusiasm from both the blind students and the school observing the way of the student's reading a book in braille and answering questions from the teachers. The headmaster of the school who had experienced studying together with blind students in India is understanding the integrated education well and very eager to develop it as well as all other teachers.

FLOODED JUDDHA SECONDARY SCHOOL

(translated from page 5)

Juddha Secondary School has suffered from a heavy flood a year before in Gaur in Rautahat District we went to comfort disabled people. We saw damages in a room used as a hostel, which was flooded up to 1.5m high.

Juddha Secondary School started integrated boarding education for 4 blind students with the support from us this year. The School has 1,600 students and even an assembly hall, while the boarding room for the blind children is old and shady. Also, the room has not been prepared for a heavy rain. The preparation of good living conditions is necessary to encourage the blind students to live and learn vigorously.

THE PROGRESS OF BARA CBR PROJECT

(translated from page 6)

Almost 6 years have passed since Bara CBR Project has begun in 1989. At the beginning of the Project, we hardly could foresee how our aid project of the visually impaired goes in Bara District. However, we have developed the Project to conduct rehabilitation, integrated education, eye care and vitamin A distribution throughout 105 villages in the whole District. With a constant effort of NAWB, Bara CBR staff and THKA (Tokyo Helen Keller Association), Bara CBR Project is highly appreciated as a good example of CBR in Nepal today. We will start a final follow-up program in Bara for next 3 years from this July under the agreement with Social Welfare Council.

BARA EYE CARE PROJECT

(translated from page 6)

At the Eye-Clinic of Bara CBR Center 4 ophthalmic assistants are being stationed

and rotating to care eye-patients there. They are field-workers who were all given training for an ophthalmic assistant at the medical department of Tribuvan University. Bara District is well-known for the highest sightless rate in Nepal as a large number of cataract, vitamin A deficiency and trachoma patients exists there. Before the Eye-Clinic was open, local people had hardly received treatment because there was not any hospital near their house and they could not afford high medical expenses. Currently they are able to receive treatment at the clinic for free of charge. Everyday many patients are coming and about 7,000 people receive treatment there annually.

Bara CBR Center started itinerant Eye Care and Vitamin A Seminar at school in Bara. The four ophthalmic assistants are giving instructions about food including Vitamin A and eye-disease to students and teachers there. Their activities are so diverse and significant that we can not develop CBR Project without them.

FIELD WORK

(translated from page 6)

We visit blind person's house in a village and evaluate his or her situation through interview. A problem is that the interview takes a long time. As many people in a village did not go to school, they are not able to speak Nepalese. Then we must translate their local language into Nepalese for the interview. Also, the interviewed person and even his or her family members are not always be able to answer our questions exactly.

Whenever we visit blind person's house, we are surrounded by villagers who want to look at us curiously. Then we have to be so patient and keep asking questions to finish our interview job although we are tired of being surrounded by the crowd. When we do field work, we always feel time flies so fast.

THE EXAMPLES OF SELF-RELIANT PEOPLE

(translated from page 7)

Mr. Jitan Saha Teli, aged 35 lost his sight when he was two years old. He became able to walk out of his house freely without other people's help and do agricultural work himself since he was given training. At present his family and neighbors are happy to see the way of Mr. Teli's living.

Mr. Bigu Prasad Yadhav, aged 33 lost his sight at the age of ten. Currently he is able to walk, live and work without any help since he was given training. Mr. Yadhav even can climb a bamboo tree, cut the leaves and give them to a water buffalo himself.

チャリティ・コンサート

♪ 風とこころのありか ♪

—— 大勢の皆さんの共感を得て ——



1994年 平成6年の師走も押し迫った21日(水)、前年に引き続いてのチャリティ・コンサートを開催しました。アジアの豊饒な大地と、そこに悠久の時を刻んでいく人々の暮らしをモチーフに、私たちもひとときアジアの風を追う旅人になろうという試みです。

当日の出演は、ジャズをベースに民族音楽など幅広いジャンルを曲想に取り入れ、まさにサウンド求道者たるグループ「ネオ・オリエンタル・セカンド」と、環境問題に取り組みつつ独自の音楽の場を切り拓いているジャズ・ピアニスト河野康弘。

コンサートに先立ち、ネオ・オリエンタル・セカンドのリーダーでベース奏者・水野俊介とボーカル・塚越トミイはネパールへ。2週間ほど滞在し、新曲「風とこころのありか」の構想を得ました。そして当日の楽器編成にはネパールから持ち帰ったサーランギも起用。ピアノ、ベース、パーカッション、ボーカルに加えて尺八を配し、アジアの風のうなりとたゆたいを伝えました。忘年会のスケジュールの間を縫ってご来場くださいました皆さん、ありがとうございました。

「MY DAY」で英語とあそぼう！

東京ヘレン・ケラー協会制作の英語教材「MY DAY」は、興味の対象を“こどものころ”でとらえ、イラストを多用したテキストとCDで構成。楽しみながら、家族や友だち同士で英語を覚えることができます。CDでは自然な発音を習得。子どもの大好きな歌もたくさん入っています。もちろん

井口理事

「第6回毎日国際交流賞」を受賞

当協会理事・井口淳は昨年10月1日「第6回毎日国際交流賞」を受賞、毎日新聞大阪本社オーバルホールにて記念講演を行いました。

「……自らが盲人でありながら、ネパールのひとびとの感謝と共感を呼んでいることは、多くの障害者の励みにもなる。」これが、受賞理由の最後の下りです。

井口理事は1959年、新聞社在職中に失明。「点字毎日」などを経て、78年から当協会理事として、点字出版事業などを通じ、視覚障害者の文化・福祉に貢献してきました。そして、アジアの中で社会的差別に喘ぐ視覚障害者を援助する目的で、「国際障害者年」の翌年に海外盲人援護事業を開始。自らの障害体験を通してネパールにおける援助活動を続けています。

昨年8月には同じく井口理事が外務大臣表彰を受けました。いずれの受賞も、10年におよぶネパールでの活動が高く評価された結果だと自負しています。障害分野における国際協力はまだまだ未成熟ですが、この受賞を励みに当協会はますますアジアの障害者のために活動を推進していく決意です。



「毎日新聞」

1994年9月16日付け

テキストでつづりの確認もできますし、イラストはぬり絵にもなります。点字版も用意しました。価格は、CDとテキストで5,100円(送料700円)。

☎03(3200)0810(直通)、03(3200)1310(代表)

郵便振替口座: 00190-5-173877

この「MY DAY」収益金は、海外盲人援護事業のために使われます。

1994年度事業報告

1. 視覚障害者リハビリテーション(CBR)事業

本年度も郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受けて、ナラヤニ県バラ郡においてCBR事業を継続実施した。本事業は本年6月で開始6年を経過する。この間、バラ郡全域105カ村、409,141人(67,943世帯)に対して個別調査を行い、この調査によって見いだされた視覚障害者470人に対して更生相談、歩行・日常生活技能訓練、職業訓練のサービスを提供し自立を促してきた。また、白内障患者7,023人、その他の眼疾患者16,001人、地元住民に対して無料眼科診療やビタミンA配布、失明防止講習会などによる失明予防事業を推進してきた。こうした地道な努力により、バラCBRは、他の国際NGOがネパールで行っているCBRの中で最も高い評価を受けており、CBRのモデルとされている。

2. 点字出版事業

今年度も初等～中等教育(第1～10学年)課程の点字教科書819冊(1994年6月15日～1995年4月13日)および点字カレンダー200部を作成し、ネパール全土の統合教育校27校(盲学校1校を含む)に配布した。

また、出版局の協力により印刷課長を現地に派遣し点字製版機と印刷機の点検・整備およびスタッフの技術指導を行った。

3. 統合教育事業

バラ郡の統合教育校5校(盲児童20人)にて、引き続き特殊教育のプログラムを実施した。また、昨年度援助を開始したロータート(盲児童4人)、ルバンディヒ(盲児童11人)、バグルン(盲児童12人)各郡の拠点統合教育校においても同様のプログラムを実施した。さらに、バラ郡の拠点統合教育校であるドゥマルワナ高校(盲児童12人)に盲児童のための寄宿舎を建設、この3月に完成した。この学校では今まで空教室を寄宿舎として使用しており盲児童は不便な生活を強いられていたが、寄宿舎完成により快適な生活と学習の場が確保され、増員も可能となった。

また、統合教育の質的向上を目的に、1995年2月10日～16日の日程で「全国統合教育講習会」を開催した。この講習会には、全国の統合教育校から26名の点字担当教員が参加し、点字数学記号を習得した。

4. 失明予防と眼科診療

1992年よりバラCBR事業の一環として、CBRセンター眼科診療所において無料診療を行っているが、昨年度からカトマンズで研修した4人のスタッフを眼科助手として配置した。これにより眼科医の定期的な診察(月2回)の他に毎日の検診が可能になり、地域住民から大変喜ばれている。1994年5月15日～1995年3月14日までの10カ月間に受診した総患者数は3,349名である。

また、CBRセンターにおいて、ソーシャルワーカー、

教育関係者、CBRスタッフを対象に、眼科医を講師に「失明防止講習会」を1994年7月と12月の2回開催した。さらに、学校レベル、村レベルの巡回講習を実施し、ビタミンAを多く含む野菜の摂取の重要性を中心に、栄養知識や公衆衛生知識の普及を図った。

5. スタディ・ツアーの実施

昨年12月から1月にかけて、第4回目の「タイ・ネパールスタディツアー」を視覚障害者を対象に近畿日本ツーリストの協力を得て実施した。本ツアーは異文化に触れながら、他国の視覚障害者福祉の現状視察と交流を行うことである。今回はバンコックにおいてライトハウス、職業技術訓練センターを見学、交流。ネパールにおいては当事務局が展開している援護事業をはじめ、ヘレンケラー・インターナショナルのCBR事業、統合教育校などを視察した。また、ネパール盲人協会を訪問しネパールの視覚障害者と膝を交えての情報交換を行うと同時に、合同のヒマラヤトレッキングを敢行し参加者から大変好評を得た。

6. 広報・募金活動

- ① 8月「愛の光通信」第9号を発行して広報・募金活動を行った。
- ② 9月30日～10月2日、日比谷公園で行われた国際協力フェスティバルに参加。写真展を通じて広報活動を行った。今回はボランティアの協力もあり活気あふれる活動となった。
- ③ 12月21日、なかのZERO小ホールにて「風とところのありか」と銘打って、ジャズ・ピアニスト河野康弘氏とジャズ・グループ「ネオ・オリエンタル・セカンド」の協力を得て2回目のチャリティ・コンサートを行い、海外盲人援護事業への協力を呼びかけた。

7. その他

- ① ネパールの援護活動に対し井口事務局長が外務大臣表彰を受けた。(1994年8月3日)
- ② ネパールの援護活動に対し井口事務局長が第6回毎日国際交流賞を受賞し、記念講演を行った。(1993年10月1日)受賞に関して毎日新聞が以下の紙面で紹介。
「毎日新聞」1994年9月16日付
「毎日新聞」1994年10月19日付
- ③ 1994年7月19日～24日、「アジア太平洋障害者の十年キャンペーン94マニラ会議」に参加、フィリピンのCBRなどを視察した。
- ④ 1994年11月6日～7日にかけて「国際ボランティア貯金」預金者代表の現地調査を受けた。
- ⑤ 1994年11月14日～1995年4月3日まで、ネパール盲人福祉協会点字出版所職員に日本語を教える目的でボランティアを派遣した。

1994年度収支計算書

自 平成6年4月1日
至 平成7年3月31日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
事 務 費	1,944,408 円	寄 付 金 収 入	14,759,663 円
賃 金	700,000	協 賛 金 収 入	185,000
旅 費	81,410	助 成 金 収 入	9,089,000
消 耗 品 費	202,880	募 金 収 入	5,485,663
印 刷 製 本 費	277,276	事 業 収 入	1,225,000
役 務	233,743	販 売 収 入	352,000
借 料 損 料 費	266,232	チャリティコンサート収入	873,000
雑 費	182,867		
事 業 費	11,476,263	雑 収 入	63,123
チャリティコンサート費	839,919	雑収入	62,080
海 外 出 張 費	226,440	雑収入(郵)	1,043
海 外 出 張 費 (郵)	1,753,328		
海 外 援 護 費	84,535		
海 外 援 護 費 (郵)	7,737,119		
ス タ ッ プ 宿 泊 費	40,900		
現 地 運 営 費	248,000		
研 修 費	87,080		
通 信 費	329,948		
雑 費	128,994		
小 計	13,420,671		
当 期 繰 越 金	2,627,115		
合 計	16,047,786	合 計	16,047,786

貸借対照表

平成7年3月31日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	8,527,173 円	繰 越 金	8,527,173 円
現 金	11,940	前 期 繰 越 金	5,900,058
預 金	8,265,233	当 期 繰 越 金	2,627,115
仮 払 金	250,000		
資 産 合 計	8,527,173	純 財 産 合 計	8,527,173

海外援護事業記録

(1994 / 6 - 1995 / 5)

94年 6月 *国際ボランティア貯金配分金決定 (6/24)
 7月 *「アジア太平洋障害者の十年キャンペーン'94 マニラ会議」に参加: 阿佐、佐々木 (7/19-24)
 8月 *「愛の光通信 No. 9」発行
 *井口理事、外務大臣表彰を受ける (8/3)
 9月 *日比谷公園で開かれた「国際協力フェスティバル」に参加 (9/30-10/2)
 10月 *井口理事、第6回毎日国際交流賞受賞(10/1)
 11月 *事業管理二名派遣: 佐々木、福山 (11/1-16)
 *国際ボランティア貯金調査団、NAWB点字出版所及びバラCBRを視察 (11/6、7)

*日本語講師として、ボランティア寺内貴代さんをNAWBに派遣 (11/14-4/3)
 *井口理事毎日国際交流賞受賞祝賀会 (11/18)
 12月 *なかのZERO小ホールにてチャリティ・コンサート「風とこころのありか」を開催 (12/21)
 *タイ・ネパールスタディ・ツアー (12/25-1/4)
 *技術指導・事業管理二名派遣: 佐々木、北条 (12/25-1/4)
 95年4月 *事業管理二名派遣: 佐々木、阿南 (4/1-16)
 5月 *ブラジルスタディ・ツアー (4/29-5/6)

寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略)

自 1994年4月 1日

至 1995年3月31日

温かいご支援ありがとうございました

(個人)

青木 貞子	秋元 武雄	阿佐 博	浅倉 久志	浅田 きよか
吾妻 敬良	荒木 薫	荒田 佐多子	在田 一則	有本 成子
五十嵐 信敬	井口 淳	石川 尚代	石川 昌宏	石原 幸栄
市角 誠	市田 克彦	市原 政春	伊藤 啓子	伊藤 定善
伊波 静男	今泉 新治	今川 勇	井村 恵津子	入江 一恵
植竹 清孝	上野 伊律子	上村 健次	遠藤 利三	大内 三良
大岡 信	大河原 正子	大谷 宗太	大西 章夫	大橋 義男
岡田 由幾子	岡山 美恵子	尾形 仂	小川 喜道	小河 静
小田 淳	小田原 孝之	小野 日央	折戸 正明	加来 典子
片桐 武昭	勝又 誠子	加藤 晃	金田 一郎	金田 正一/敏子
神谷 国男	神谷 辰夫	香山 千加子	川上 勲	川崎 力
河野 由紀子	岸 栄子	北浦 喜久子	吉良 洋子	汲田 克夫
鞍谷 清孝	黒沼 仁	高坂 正堯	肥塚 美和子	肥塚 隆
小平 嘉清	小林 一弘	小森 愛子	近藤 文郷	三枝 礼子
斉藤 惇生	佐藤 利村	沢畑 江梨果	嶋田 信子	下沢 仁
白井 雅人	菅原 ふく	鈴木 二郎	田井 須美世	高橋 輝雄
田口 タエ	竹村 実	田中 茂	田中 正和	谷川 俊太郎
玉谷都 千恵	筒井 香菜	照井 博	当山 啓	鳥羽田 節
鳥山 由子	中曾 栄吾	中村 安信	中山 弘子	長島 好夫
長屋 久美子	西條 一止	西本 行男	野口 三男	橋本 時代
八田 公雄	埴谷 雄高	林 大	早田 義博	原田 美男
檜山 寿子	福原 ササノ	藤井 悦子(三笠市)	藤井 悦子(日野市)	藤井 清光
藤井 誠司	藤本 和美	古市 薫	星野 彰	堀井 信一
本間 昭雄	政本 ゆたか	松尾 宏之	水間 保実	三宅 正太郎
宮原 満洲男	目黒 千代子	森 典子	両角 征吾	安平 聖弘
藪内 清	山内 潤子	山内 光則	山崎 邦夫	山田 あき子
山田 隆造/元子	山辻 英也	山本 景子	湯浅 寛	吉田 旬
米田 昌徳	若林 弘子	渡辺 直明	渡辺 尚道	
物品寄付:	石川 純子	関野 てるこ		

(団体)

(株)アドベンチャーロード

Q P 薬局募金箱

暁星学園高等学校

高垣商店

福島県視力障害者協力会

(有)やなせスタジオ

(有)大本印刷

近畿日本ツーリスト新宿駅前支店

小林動物病院募金箱

高松キワニスクラブ

宮古南静岡視覚障害者会

関西電気(株)

岐阜盲学校高等部生徒会

(株)コンビック

日本ネパール友好協会

武蔵野女子学院生徒会



国際協力フェスティバルで写真展を開催。ボランティアのみなさんありがとうございました。



ドゥマルワナ統合教育校寄宿舎の落成式で歌を披露する盲児たち（ネパール・バラ郡）

東京ヘレン・ケラー協会
オリジナルテレフォンカード
頒価 2,000円（2枚セット）

TELEPHONE CARD 50



HELEN KELLER 東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局 TEL: 03-3200-1310

アジアの盲人に愛を込めて...



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインした、オリジナルテレフォンカード2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。本テレフォンカードの純益は、すべてネパールの盲人援護に使われます。

募金のお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替：00150-5-91688

銀行口座：さくら銀行新宿支店（普）5101190

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第217条第1項第5号および、法人税法施行令第77条第1項第5号にかかげる社会福祉法人でありますので、当協会に対するご寄付は、所得税法第78条第2項第3号、法人税法第37条第3項第3号の規定が適用され、税法上の特典が受けられます。

編集後記

阪神大震災で被災された皆様には、心から哀見舞い申し上げます。未だ避難所暮らしの方々は本当につらい思いをされていることと存じます。1日も早い復興をお祈り申し上げます。

さて、12月には恒例のネパール・スタディ・ツアーを、今年のゴールデンウィークにはブラジル・スタディ・ツアーを敢行致しました。活動の一環として始めた企画ですが、今や視覚障害者が単独でも自由に参加できるツアーとして、好評を得ており事務局としても喜んでおります。

昨年は協会理事が名誉ある二つの表彰を受けました。皆様のご支援の賜と、心より感謝申し上げます。これを機に一層邁進する所存です。今後とも変わらぬご声援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。（H.S）



**TOKYO HELEN KELLER
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169 東京都新宿区大久保3-14-4

TEL: 03-3200-1310 FAX: 03-3200-2582